

JAC AWARD 2024 私が選ぶベスト3



鈴木晋太郎

株式会社電通 クリエイティブディレクター／CMプランナー／コピーライター

1981年生まれ。愛知県出身。東京大学大学院を修了後、2007年電通入社。情報システム局、営業局を経て、30歳でクリエイティブ局に。主な仕事に日清カップヌードル、日清焼そばU.F.O.、花王アタックZERO、UQモバイル、ジャンボ宝くじ、湖池屋プライドポテト、Spotifyなど。

ディレクター部門

★First place

▶ 「ぜんぶ想定する。」 野上 可鈴（東北新社）

セキュリティというテーマを、個人的な感情に掘り下げて捉えているところが魅力的。

ふだん他人に見せることがない、心の中のプライベートな部分に触れられた感じがしました。

勝手に頭の中で想像して、勝手に目を背けたくなる感じも、映像で丁寧に描かれていると思いました。

最後のコピーは違うほうが良かったかもとか思いつつ。一番好きでした。

★Second place

▶ 「伝えたい想い」 寒川 未空（電通クリエイティブX（現:電通クリエイティブピクチャーズ））

とにかく主人公の2人がかわいい。声も顔も不器用なところも、この駅にぴったり。

出演している人がトクをする映像ってやっぱり良いですね。

ややベタさのあるストーリーですが、彼女の好きなどころのディテールが気が利いていたり、

後半のアップの切り返しのテンポ感や、潔いタイトルの入れ方が気持ちよくて、新鮮に感じました。

★Third place

▶ 「家族の視線」 齋藤 大知（博報堂プロダクツ）

30秒の中で、説明的になることなく、エモーショナルなストーリーを描けていることが見事。

セリフ、オフナレ、絵、コピーで伝えるべきことが緻密に役割分担されていると思いました。

特にカメラアングルの工夫によって、1 シチュエーションとは思えないような充実感があるなど。

ただ、これってセキュリティというかプライバシーでは、というのが気になって3番目にしてしまいました。すみません！

ディレクター個人応募部門

★First place

▶「街の形」 三木 章太郎（東北新社）

セキュリティ意識によって排除される人がいるという視点、テーマからの距離感が秀逸。漂流者の比喩を導入にすることで、社会問題モノ特有の説教臭さを回避していたり、コピーを対象物で隠すことで、能動的に考えることを促していたり、技が効きまくりですね。コピーが上手いので、我々の立場からすると、ご一緒するときに身が引き締まるなと思いました。

★Second place

▶「三者面談」 杉本 菜々恵（博報堂プロダクツ）

実は、一步間違ると白々しくなってしまうそうなりスキーな企画なのですが、映画のような美しいトーンの映像によって、巧妙に仕上げられていると思いました。あと、先生。都合の良い親子に対して、終始先生が抑制の利いた芝居をしていることで、この動画に“品”をもたらしていると思いました。

★Third place

▶「トンネル警備」 渡邊 大祐（電通クリエイティブX（現:電通クリエイティブピクチャーズ））

CMではあまり見ないトーンのアニメなので、目を引くと思いました。特にトップカットの足が好き。体内のセキュリティとしてくしゃみを描くという発想も、身を守るためのセキュリティの発動が身体の持ち主に不都合をもたらすストーリーも、知的で良いですね。実写の人物の描き方がマンガっぽくなりすぎたことで、ややチープに見えてしまっている点だけ、もったいないなと思いました。